

2013年度「グローバル教育取り組み」部門 作品情報一覧

■独立行政法人国際協力機構理事長賞

氏名	所属	タイトル	取りあげた国・地域	作品を通して伝えたいこと
宮崎県立富島高等学校 生徒商業研究班	宮崎県立富島高等学校	BOPビジネスの研究と実践活動～ソーシャル・イノベーションを目指して～	ウガンダ	私たちは、以下のようなBOPビジネス案を展開しています。 アフリカの学校に通う子どもたちに、デジタルカメラで撮影する技術を学んでもらい撮影を行います。撮影された画像を私たちが受け取りポストカードに編集。完成したポストカードは、日頃学んでいる商業の知識と技術を生かして販売活動を実施します。販売活動によって得られた益金は、撮影してくれたアフリカの子どもたちが通う学校へ送金し、学校運営に役立てて頂きます。 高校生でも社会貢献とビジネスを融合させ、課題解決の一助を担うことができるのではないかと、また、国際理解や国際協力についての意識が高まり、課題解決のために行動を起こそうとする原動力が生まれるのではないかと2つの仮説を立て日々研究と実践活動を行っています。

■独立行政法人国際協力機構地球ひろば所長賞

氏名	所属	タイトル	取りあげた国・地域	作品を通して伝えたいこと
清水 香奈	群馬県立榛名養護学校	みんなちがってみんないい～文化も考え方も～	ブータン	特別支援学校において、国際理解教育は未開拓の分野ですが、特別支援学校でも、国際理解教育を行うことは、生徒の世界を広げ、心の成長を促すために有効であるということを知って頂きたいと思います。 知的障害のある生徒は、生活経験の不足や過去の辛い経験などから、自分に自信を持てず、自己肯定感が低くなってしまったり、他者と関係を築くことを苦手としたりする面があります。 本実践では、国への理解から、自己理解、他者理解へ広げていきたいと考えました。異文化に触れ、異文化を受け入れていく経験をすることで、自分とは異なる個性を持つ他者を理解し、互いの良さを認め合い、協力し合う気持ちを育成していきたいと考えます。また、生徒が社会に出てからも、新しい環境や人との出会いが待っていますが、相手を認め、環境を受け入れていく柔軟な力を身に付けてほしいと考えています。そして、他者と自分を比較し、自分はこれができない、あれができない、と捉えるのではなく、人とは違うけれど、自分にも良さがあると自信を持てるようになってほしいと思います。

【入選】

氏名	所属	タイトル	取りあげた国・地域	作品を通して伝えたいこと
幸田 隆	豊田市立若林東小学校	人に優しく 国際理解編：地球の課題を知り、自分ができよう	カンボジア、ルワンダ、フィリピン	1. どのように、学校がNGOやJICAと連携を図りながら、体験型のグローバル教育を体系的に行うことができるか。 2. どのように、グローバル教育に、平和教育を取り入れていくことができるか。 3. どのように、地球の課題を、自分の問題として、とらえられるようにするか。 4. どのように、総合的な学習の時間において、国際理解と福祉を関連付けて、学習活動を展開するか。
佐野 恵広	岡崎市立井田小学校	「オランウータンを救え！」－パームオイルは、人と地球に優しい？－	マレーシア（ボルネオ島）	カップ麺やスナック菓子、冷凍食品、洗剤や化粧品等に使用されているため、我々の生活に欠かせないパームオイル。このパームオイルは、発展途上国の人々の重要な糧でもある。しかし、パームオイルを採るための油ヤシは、ボルネオ島のジャングルを伐採してプランテーションで生産されている。そのため、熱帯雨林の減少による地球温暖化、生物多様性の危機という問題が起こっている。また、違法労働や児童労働の場にもなっている。多くの問題を含むパームオイル。これを教材として取り上げることで、子どもたちに地球環境や生物多様性について考えさせながら、現地の人々の生活、自分たちの生活とも上手に折り合いをつけて持続可能な環境を未来へとつなげていくことの大切さや、今現在の自分たちがやるべきこと、できることを考えさせ活動させていった実践である。
本田 直輝	特定非営利活動法人 ジャパンアフリカトラスト	アフリカ・日本同日開催 子供たちの農業体験・食育を通じた国際交流と開発	日本、ケニア	日本とケニアの同時開催で世界の子供たちの大豆を通じた食育と国際交流の事業を行うことで、グローバルな多文化共生の豊かな社会の実現と子供の食育と日本の食文化の伝承および貧困改善を推進する事業の実践を伝えたいと思います。 日本とケニアで子供たちを対象に、国際交流による農業や食育を行うことにより、子供たちにとって農業体験や食文化の貴重な経験とグローバルな視点を養い将来国際的に活躍できる人材育成を推進することに寄与し、またアフリカの国際協力開発にも寄与し、さらに日本の食文化で最も大事な大豆をアフリカに伝承し、大豆料理を通じた日本の精神や食文化を積極的に伝えることが出来る事業の様子を伝えたいと思います。

【佳作】

氏名	所属	タイトル	取りあげた国・地域	作品を通して伝えたいこと
立命館宇治高等学校 Bangladesh 支援プロジェクト	立命館宇治高等学校	村の子どもたちに希望の灯りを～無電化地域への太陽光発電システム導入～	Bangladesh	高校生による、 Bangladesh 農村部の子どもたちの教育環境改善のためのプロジェクト。高校生が自ら現地を見て、現地の人々の声を聞き、話し合うことでニーズを探り、「自分たちがどこまでできるのか」を追求し実現していく、2年半におよぶ活動記録。 「夜も勉強して成績を上げ、中学校や高校に通えるようになりたい」という、電気が通っていない村の子どもたちの願いをかなえるため高校生が目標にしたのは、小学校の生徒全員への充電式LEDライトの貸与システムの構築と、小学校への太陽光発電・充電システムの設置。普通の高校生でも、自ら動くことで多くの人の力を借りて、大きな目標を達成することができた。
敦賀 和芳	北海道北見商業高等学校	高校生が「フェアトレード商品」を勉強してみた	ネパール フィリピンなど	国際理解協力はまず知ることから始まるという事を良く聞きます。まずは、生徒に世界の現状を少しでも知ってもらおうと思い、机上の学習に実際の販売体験学習を組み合わせた教材を作成し、実践を行っています。この作品の事例は1年間かけて、フェアトレードについて、様々な視点から生徒にアプローチをさせています。また、5年間継続してきたことで、過去の資料から、現状と過去とを分析することも可能です。授業の始めは、国際理解協力について関心が薄かった生徒も、活動をしていくうちに、自分の知らなかったことを知り、また、販売体験を通して、自分の考えを他人に伝えることの重要性を学ばせることができたと思います。皆様がこの作品をご覧いただける機会がありましたら、是非、フェアトレードを通して国際理解教育をおこなう、材料の一部になり、さらに国際理解教育の輪が広がっていくことを期待しています。
名古屋国際中学校・高等学校	名古屋国際中学校・高等学校	国際理解研修マニラコース	フィリピン(マニラ及びその周辺)	本校の国際理解研修で、フィリピンのマニラ国際ボランティアコースを設定して3年になります。参加生徒は、渡航前には「汚い」「バナナ」「治安が悪い」「台風」といった断片的で、また一部偏ったイメージをフィリピンに抱いています。しかし、現地で2週間の研修を経ると、本当に多くの知識と自信を持って帰国をします。 フィリピンには、自分と同世代や、さらに年少の子どもたちが大きな困難に直面していること。そして、言葉を越えたコミュニケーションが可能であること。何より、フィリピンの子どもたちも、自分たちと同じような将来の夢や目標を持っており、互いが考える理想の地球は、笑顔があふれる平和な世界であること。 この濃密な経験を軸にした、国際人を育成する取り組みです。
渡辺 道治	天理小学校	世界とつながる・人とつながる	カンボジア	昨年の夏、カンボジアを訪れる機会を得た。現地では農業支援、識字教育、伝統織物体験、大学・小学校での授業、地雷撤去の視察、虐殺生存者のご講演等、様々な視察や交流の場に参加することができ、自身の価値観が強く揺さぶられる体験を数多く得た。その時の感動や衝撃を、子どもたちの持続的な学びへとつなげるべく、計15時間の実践を行った。本作品はその時の記録である。3年生ながら、初めて学ぶ海外の学習に子どもたちは極めて意欲的に取り組み、最終的には国際協力の第一歩を自ら踏み出したこと。さらに、取り組みを通じて多くの人とのつながりを得る中で、実践が共有され広まっていく可能性を見出したことを、本作品を通して伝えたい。
浜島 直美	大府市立共長小学校	世界に役立つでっかい会社をつくろう(大府市立共長小学校6年3組の取り組み)	アフリカ、ラオスなど	教師海外研修(ラオス)で出会った青年海外協力隊の姿を見て、この授業案を思いついた。チームを作り、仲間と協力しながら1つの課題について調べたり、発明品を考えたりするプロジェクトだ。自分達の調べたことや学んだことをパワーポイントにまとめ、多くの人に伝えていくのだ。自分の意見だけですすんではいけない。仲間と共に作りあげなくてはならない。くやしくて涙をながしたり口論になることもある。しかし、それをのりこえれば、すばらしい作品と絆がゲットできるのだ。
清田 憲一郎	熊本市立五福小学校	世界を助けるプロジェクト～給食を残さず食べよう～	ベナン、フィリピン	世界の同年代の子供達の抱えている課題を知り、自分たちでできることを考え行動に移す。世界の子供達が抱えている課題に対して寄付を募るのではなく、自分たちで決めた課題に向けて自分たちも行動し、そのことで周りの大人達を動かすことに意味があると思う。今回は、自分たちが抱えている給食の残食を課題にし、課題に対する目標を達成することで地域の大人達である「女性の会(婦人会)」を動かしアフリカのベナンへの給食支援を行うことにした。
小島 江津子	千葉県立佐倉南高等学校	エルサルバドル次期大統領選挙に立候補しよう	エルサルバドル	日本から遠く離れた「関係のない国」として生徒が捉えがちな途上国の問題を、主体的に考えさせたい。そこから、世界の国々の多様性、気候風土や生活観、文化などの価値観の多様性にも気づかせたい。先進国である日本の中だけでの生活に疑問を持たずにいることに、視野を広げさせたい。同じ世界に住む人としての絆を大切にさせたい。日本が途上国に行っている支援の意義や目的を理解させたいといった目的で、今回の授業案を作成した。 学習意欲があまり高くない生徒達を対象に、授業者としてエルサルバドルで見て聞いて来た事を生徒にどうしたら受け止めてもらえるか、考えてもらえるか。この課題に対して、授業の方法を工夫していけば、少なからず生徒達が感じ取ってくれるのだ、という授業実践報告です。